奈良県立大学ユーラシア研究センター学術叢書３　　ID111359294

奈良に蒔かれた言葉　近世・近代の思想」

令和４年（2022）３月31日発行　奈良県立大学ユーラシア研究センター編著

大和近代の風景と自然観一考　杉と桜の文化資源学
本多静六「吉野山の桜制復古」　岡本貴久子著

東京帝国大学教授「本多静六」：日本近代における造林学と造園学を牽引し、明治神宮の森や日比谷公園他各地の環境や景観づくり実施。公園の父

氏の近代吉野山の地域と風景の再生を目指した大正10年（1921）の取り組みを紹介する。

吉野の花は古来蔵王権現の神木であり、帰依するために桜を奉納し献木する風習があった。鎌倉時代以降盛んとなり桜花爛漫の吉野山だった。

残念ながら、明治時代に入り「王政復古」により、神仏分離令や修験道廃止令に伴う廃仏毀釈は吉野山の桜樹や名勝古跡は破壊された。

大日本山林会：明治15年（1882）設立

明治32年12回全国大会で案内役は「日本林業の父十倉庄三郎」が地元奈良県で実施。

明治36年（1903）本多静六が農科大生と造林実習で、師と仰ぐ土倉庄三郎を訪れた際、吉野山の桜が荒れた姿を見ていた。

大正10年(1921)第31回全国大会（奈良県）と吉野視察旅行を本多静六が中心になって行った。当時の吉野山の桜は見る影もなく、秀吉が大観桜会を開いた場所は一面に杉又は雑木林と化し桜樹は杉林中に根株がある程度だった。

そこで、本多静六が「吉野山の桜政復古（おうせいふっこ）」を提言する（王政復古を捩ったもの）。

古例にならった桜の寄進植えの復活だった。具体的には、苗木５銭、植付け料５銭、５年間の管理料10銭、合計20銭で誰もが簡単に寄進できる方法だった。大会参加者も本多博士発起の「桜樹を寄附」に賛同した、寄進された桜は吉野山保存会を中心に地域の人々の協力で保護管理されてきた。

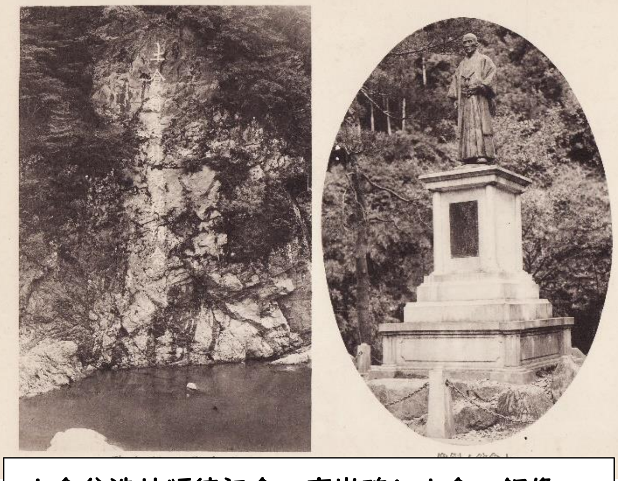
蔵王権現への「祈りと実践」が実を結んだ。

なお、視察旅行の最終日には「土倉翁造林頌徳記念の磨崖碑」除幕式を行った。

写真提供：成瀬匡章氏

大正10年第31回全日本山林大会全国大会
本部会場　県公会堂

同大会吉野樽材視察　本多静六の姿がある



土倉翁造林頌徳記念の磨崖碑と土倉の銅像

昭和８年蔵王堂方面　田畑と化す禿山